

円の黒字となります。

より単純に考えて見ますと、前年度からの繰越金が2億円あったとします。そして当年度では1億円の黒字が出て翌年度に繰り越したとすると、形式収支は黒字でも、単年度収支では1億円の赤字ということになります。

ですから、単年度の決算を前後の年度との関係から見ていくことも必要になります。

さらに、今まで基金として積み立てていたお金をいくらかも使ったかもチェックしなければなりません。

12年度では、一般会計で管理する基金から、約5億6千770万円を取り崩す一方、3億781万円を積み立てましたので、差引2億5千989万円を実質的に使ったこととなります。

チェック2 黒字額の内容をチェックします

黒字額は大きければ大きいほど良いというものではありません。行財政運営が効果的に行われたかどうかが問題となります。

たとえば、国民健康保険特別会計の黒字額は、3億5千324万円もあります。この中には、本来平成11年度以前に受け取るべき医療費に関する交付金が精算金として1億631万円も入ってきたり、逆に13年度以降で精算（追加交付・返還）すべきお金が1億2千万円程度見込まれるなど、見掛け上、膨らんでいる部分があります。

同じように、介護保険特別会計の黒字額にも、13年度内に国や道などへ返

還しなければならぬ4千231万円が含まれています。

これは、国や道からの補助金などが概算（見込み）で交付され、翌年度以降で精算する仕組みになっているため、インフルエンザやかぜなどの流行に大きな影響を受けやすい医療費を扱う、国民健康保険や老人保健などの特別会計によく見られます。

チェック3 歳入はどうだったの？

一般会計の歳入を見てみましょう（表3）。市の収入の中で、市税と地方交付税が使いみちの自由なお金の2本柱です。

表3 平成12年度決算の歳入の内訳 (前年度比較)

費用	平成12年度	平成11年度	増減
市税	52.5億円	55.2億円	△2.7億円
地方交付税	59.0億円	57.4億円	1.6億円
国・道支出金	37.4億円	53.7億円	△16.3億円
市債	21.9億円	37.2億円	△15.3億円
その他	53.8億円	45.3億円	8.5億円
合計	224.6億円	248.8億円	△24.2億円



▲クリンクルセンター

市税は、市民税や固定資産税などが代表的なものです。長引く不況や有珠山噴火の影響のため、平成11年度に比べて4.9割減少しています。

また、地方交付税は、所得税や法人税など国税として徴収された税のうちから、一定割合を地方公共団体のサービスに大きな差が生じないように、財政力の均衡を確保するため国から交付されるものです。

市債は、市の借金（長期借入金）のことです。12年度では、新たに約22億円の借入れを行いました。11年度に比べると大幅に減少していますが、この原因は、超大型事業だった新ごみ処理施設（クリンクルセンター）の建設事業が11年度で終了したためです。市債の残高については、チェック6で説明します。

国・道支出金は、市が行っている特定の仕事に対して、国や道から交付される補助金などのことです。

たとえば、市が自営業者の方へ児童手当を支給する場合、その6分の4が



登別市の基金

市の財産には、土地や建物、預金、現金、債権などがあります。その中から預金・現金を積み立てている基金について説明します。

基金は、その目的が条例で定められていて目的外に使用することはできません。

市には、経済の不況により大幅な税収減に見舞われたり、災害の発生により思わぬ支出の増加を余儀なくされたりするなど、やむを得ない財政需要に応じるための『財政調整基金』（平成12年度末現在高 5億912万円）と市債の償還に必要な財源を留保し、将来にわたって健全財政を確保するための『減債基金』（平成12年度末現在高 5億6千465万円）の二つの基本的な基金を積み立てています。

今号では、そのほかの目的別の基金と残高をお知らせします。

◎いきいき人とまち基金

登別市のまちづくり事業費に充てるための基金です。平成12年度は、『市制施行30周年・西暦2000年市民実行委員会』への補助金や中学生の『海外派遣事業』などを行うため、3千555万円を使用しました。

◆平成12年度末現在高

1億1千671万円